# 吟遊詩人放浪記

川島徹也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吟遊詩人放浪記

【Ｎコード】

Ｎ７１５４Ｂ

【作者名】

川島徹也

【あらすじ】

吟遊詩人ルーカスは富と名声を捨て放浪の旅に向かうのであった。

# プロローグ

月の光があたりをくまなく照らし、冷たく鋭い氷の刃のように降り注いでいる。
その冷たく鋭い光は私の心を洗い清めてくれるかのようだった。
そんな光の中では、どんなに感性の貧しい人間でも何か神秘的な力を感じてふと物思いに耽るものだ。
森の中も静寂に包まれている。森の動物達も、私のように静かに物思いに耽っているのだろうか……

野営の薪を新たにくべると、薪のはぜる音があたりに響いた。
そして愛用のライアーを傍らに引き寄せた。この見事な楽器は国内でも有数の名職人に作らせたもので、音色も細工もこれ以上とない一品だ。
弦をそっと弾くと綺麗な和音が静寂の森に響き渡る。
今となってはこの品が私の過去の栄光の暮らしの名残の品だった。

私の父はそれなりに高名な魔術師だった。地方領主おつきの魔術師で、なんら不自由のない暮らしができたのだ。
私は父や一番上の兄のように魔術の才能に恵まれたわけでも、二番目の兄のように剣の才能に恵まれたわけでもなかった。
何もする事もなく、ただ堕落と怠惰に満ちた私の生活を変えたのはこの楽器と歌だった。

はじめはほんの戯れのつもりだったが、きっと天性の才能でもあったのだろう。私の歌は瞬く間に有名になり、領主のお抱えの吟遊詩人となった。
若くして富と名声を手に入れ、華やかな生活を送っていた。
寂れた夜の酒場で、あの男と出会うまでは……

その男は長く険しい航海を終えてぼろぼろになった船のような、みすぼらしく哀れな初老の吟遊詩人だった。
見るからに酒なくしては何もできない事は目に見えていた。いくら経験の差があるといっても、あの様子では明らかに私のほうが技量あるだろうと思っていたし、その上男は左腕が不自由であった。
それに対して、私はまだ成人したばかりの意気盛んな若者であった。傲慢で礼儀知らずで、愚かにも自らの腕前にかなう者はいないとまで思っていた。
しかしそれも男が歌いだすまでだった。

しわの刻まれた手でリュートをかき鳴らし、喉をふるわせて歌った。
英雄の武勲を歌ったわけでも、恋の駆け引きを歌ったものでもなく、望郷の思いを歌にしたものだった。
故郷に残してきた家族や友人に対する暖かい思いがあふれていた。ある時は激しく。ある時は優しく語り掛けるように……
そしてその歌は、冒険者風情の男達や旅の行商人、酒場の給仕娘、日雇いの労働者達、一人一人に語りかけ、その心に深い悲しみと懐かしい故郷の甘い思い出をかきたてた。
やがて歌が終わったときに、気が付いてみると、私ですら感動に胸を打たれ涙を流しているほどだった。

その次の日だった。私が屋敷を飛び出ていったのは……
富も名声も投げ捨てて、あてもない旅に出ることにしたのだ。
なぜだろうか？
己の無知と浅はかさが許せなかったのだろう。
この男との出会いがなければこんな事は考えず、領主お抱えの吟遊詩人として、歌い続けることができたであろう。
たが、この男と出会ってしまってからは、いかに自分が無力で世

間知らずか若造であったか思い知ったのだ。
他人を欺く事ができても、自分の心を欺く事はできなかったのだ。
このまま、領主の館で歌い続けることなどできようもなかった。

歌を歌うことができなくなった吟遊詩人は世間から見ればただのゴミくずかもしれない。
だが諦めるにはまだ早いと思った。だからこの放浪の旅に何か期待を込めいていたのだ
色々な人と出会い、生きるさまを見つめよう。きっと何か見つかるかもしれない。

そして私は眠りについた。これから先待ち受ける様々な期待を胸に秘めて……。

# 第一話

春の風は暖かで心地よい。芽吹きの季節が今年もやって来た。
村の農夫達は、今日もせっせと作物の種をまく。秋の収穫を夢を見て……
そんな農夫たちの表情は、希望に満ち溢れているように見えた。
屋敷を出てはや五日。もう食料はつきかけていた。
小さな村の広場には、田舎者の農夫と商人を兼ねたような男が、旅の冒険者を相手に保存食の乾パンなどを売っていた。
「いらっしゃい。あなたも旅の人だね。どこから来たんだい」
手早く商品を並べ直しながら、笑顔で話しかけてきた。
「ここから東に一週間ほど行ったところにある街から来たんだ」
私はぶっきらぼうに言った。
「そうかい。東のほうから来たのかい。西に向かってるって事は首都でも目指してるのか」
「そうだ」
「ってことは出稼ぎに首都に向うのかい。大変だねぇ」
男は同情のまなざしを向けながら言う。

「違う。職探しじゃない」

私は否定した。日雇いの労働者と一緒にされては困る。

「そうだったのかい、それは失礼した。冒険者にしては随分と軽装で若く見えたからな。それなら気をつけなさい」

男の物言いに憤りを覚えたが少々気になる事を言っていたので尋ねてみた。

「何に気をつけるんだ？」

「春ってのは、木々が芽吹いたり、小動物たちが活動を始める時期だけど、同時に山賊や野党が元気に活動を始める時期だからね。職探しで出稼ぎに出る若者はあんまり狙われないけど、あんたみたいにちょっと身なりの良い一人身の冒険者なんかはよく狙われるものだよ」

男はうんうんと頷きながら、布袋に包んだ乾パンを差し出した。代わりに金貨を一枚差し出すと、男は首を振ってそれを返した。

「こんなにもらったら罰が当たってしまう。銅貨二枚でいいよ」

返された金貨をしまい、皮袋の中を探ってみたが銅貨は一枚も見当たらなかった。

「銅貨を持たないなんて随分と金持ちなんだねぇ。金持ちのお坊ちゃまが道楽の旅に出たって所かな。どうだい違うかい」

男の鋭い指摘にたじろいだ。あながち間違ってはいない。それを

見て納得した男は続けてこういった。

「普通、冒険者は金貨なんか持ちたがらないんだよ。何でだか分るかい？」

私は首を横に振った。

「扱いにくいからだよ。普段の買い物で使うのはほとんど銅貨だ。せいぜい大きな買い物でも銀貨を使うぐらいさ。金貨なんか中途半端だし、それならもっと小さくて持ち運びやすい宝石に変えるのさ」

だだ頷く事しかできない世間知らずの私がいた。

「だから、ある程度の金貨があったら宝石に変えなさい。見た感じ金貨の数、三十枚はありそうだからね。そんなにジャラジャラ音を立てて持っていたら、どうか私を狙ってください山賊様。って看板下げて歩いているようなものさ」

膨らんだ皮袋を眺める。はちきれんばかりに膨らんだ小さな皮袋は、家を出るときに貯金として蓄えていたものだった。

「さて、まあそんな話はどうでもいいんだ。山賊に襲われようが野党に襲われようが知った事じゃない。それより御代をくれないか」

右手の金貨をじっと見つめる。

こんなにも、通貨ひとつで手間取るものなのか。

「そうだね。私は金貨で支払われてもおつりを返す事はできない。かと言って御代をもらわなきゃ乾パンは買えない。それじゃあ、兄さんも困るだろ」

首を縦に振る。

「それじゃあこうしよう。御代はいらない。ただし代わりに仕事を頼みたいんだ。あんた少しぐらい戦えるだろう」

「多少ならな」

腰に吊るしてある、年代物のレイピアを指し示した。このレイピアは父から授かり受けた物で、領主お抱えの吟遊詩人になってから、暇なときに何回か屋敷の兵士に教わった事があった。

まあもっとも、素人に毛が生えた程度のレベルでけっして上手いとはいえなかった。若くして騎士になった二番目の兄と比べても足元に及ばない事ぐらい分りきっているが……

「なら問題は無いな。ちょっと首都まで護衛の仕事をしてもらいたいんだ。なあにそんな難しい事でもない」

話によると、ちょうど二日後に村の若者数人がまとまって出稼ぎに出るので、その護衛について欲しいとの事だった。　もっとも、隊商や商人でもないので滅多な事がない限り襲われはしないだろうし、道中仲間が多いほうが安心だろうといった程度のものらしい。

私は喜んで引き受ける事にした。

「そうかい。それは良かった。出稼ぎの連中は二日後に出発するから、それまで村の宿屋でゆっくりしててくれや。もちろん宿代は頂かないよ」

〈大地の恵み亭〉という名の小さな店だった。宿と小さな酒場を

かねているようなお店だ。　カウンターには八歳ぐらいだろうか女の子が店番をしていた。

「いらっしゃいませ」

小さく礼をすると、ガタンと音を立てて、カウンターの向こうに消えてしまった。

しばらくすると、また少女は姿を現した。どうやら、カウンターに届かないので椅子のうえに立っていたらしいが落っこちてしまったようだ。

「部屋を取りたいんだけど良いかい」

少女は小さく頷くと、奥の棚から古びた宿帳を取り出し、カウンターの上に広げた。

そして、ルーカスと小さく署名をした。すると、宿帳を奥の棚にもどした。

「小さいのに大変だねぇ」

「そんな事ないですよ。みんな頑張って働いています」

この少女の名は、ルイと言うらしい。

父は外で食料品の露天商。母は病床で寝込んでいて。兄が三人いて畑仕事をしているとの事だった。

家族全員で働いても暮らしはまったく楽にはならず、母の病気の薬を買うお金もなく、明日も生きられるかどうか分らないそうだ。

そう笑いながら少女は言った。

私はこの少女が、なぜこうも明るく笑っていられるのか不思議に思った。

母親が病気で家族全員で働いても、暮らすのが精一杯で後先真っ暗ではないか、そう思った。
私がこの少女と同じ立場だったら笑っていられるだろうか。
笑っていられるはずがない。絶望に打ちひしがれて嘆いている事だろう。
それに露天商の親父もそうだ。悲しみや苦しみを表情に出すことなく、仕事をしていた。
本当に強い心を持っているんだなと思った。

「お兄さん。お兄さん」

少女の声で現実世界に引き戻された。

「どうしたの、どこか痛いの？」

どうやら、目に涙を浮かばせていたようだった。あわてて涙を拭うと、すぐに部屋に案内してもらった。

私は部屋に入るとすぐに荷物を投げ置くと、愛用のライアーを抱えた。
そして今の思いを歌った。
この思い忘れぬうちに……

小さき乙女は微笑んだ
その微笑みは全ての人の苦しみを洗い流す

小さき乙女は微笑んだ
その微笑みは全ての人に喜びと安らぎを施す

小さき乙女は微笑んだ
その微笑みの奥に苦しみを秘めながら

乙女は苦しみを癒せても、乙女の苦しみを癒す事ができようか

今日も小さき乙女は微笑む
心の苦しみを隠すかのようにそっと

## 第二話

道は様々のものを運ぶ。
人、物、お金、噂。
行き交う人々は何を思うのだろうか。

二日後の早朝、私は宿の一階にいた。
約束の護衛の仕事を果たす為である。
緊張に満ちた表情の五人の少年達がそこにいた。
私より年下である事は明らかであった。

「全員そろったか」

露天商をやっていた宿屋の主人が言った。

「はい。そろいました」

少年たちの中で一番背の高い奴が言った。

「それじゃあ、みんな元気で頑張ってこいよ」

励ましの言葉を掛けると、少年達は力強く頷いた。
そして、少年達は最後に荷物の確認をすると首都に向って出発した。

首都まではおよそ一週間の道のりだ。
道もそれなりにしっかりしており、事故さえ起こらなければ何事

もなくたどり着けそうだった。

「ねえ、お兄さん」

隣を歩いていた一番小さな少年が私に声をかけてきた。

「お兄さんはよしてくれ。くれ。ルーカスでいい」

「じゃあ、ルーカス兄さん」

「それも、変な感じだなぁ」

右手で首の後ろあたりをぼりぼりと掻き毟る。
そんな私の左腕にしがみついてくるのであった。
ずっとこんな感じである。
この五人の少年のお兄さんとして慕われるようになったのだ。
悪い気分ではなかった。でも少しどうしたらいいのか戸惑うのであった。
生まれて初めての経験だったからだ。

「またお話を聞かせてよ」

左腕にしがみつきながらちょっと上目づかいに懇願する少年。

「わかった。それじゃあ聞かせてあげよう」

「わーい」

両手を挙げて喜ぶ少年たち。
そして私は小さい頃に本で読んだ物語を語るのであった。

物語を紡ぎながらふと思った。
兄を慕うってこういうことなのかな……
私には二人の兄がいた。
一番上の兄は私より七年早く生まれた。　父の魔術師の才を色濃く受け継ぎ、今では父と肩を並べる魔術師となっている。
いずれ、領主お抱えの魔術師になる事は明白で将来はほぼ確約されたようなものだった。
歳が少し離れていたせいもあったのか、あまり話した記憶がなかった。
覚えているのは、魔法が使えないことをよく馬鹿にされたことだった。
本人は冗談半分のつもりだったようだけど、本当にショックだったなぁあのときは……

二番目の兄は私より二年早く生まれた。
父の魔術の才能は私と同様にまったく受け継がなかった。
歳も近いせいもあってか、色々話をしたのを記憶していた。
いつも父に可愛がられていた、兄の悪口を言い合った事もあったなぁ……
魔法が使えないぐらいで何でこうも扱いが違うんだってね。
そういえば、兄が大事にしていた呪文書を棚の裏に二人で隠した事もあったなぁ。
父にばれて一日何も食べさせてもらえなかったっけな。
二人で色々悪さをしてはよく怒られたものだ。
仲が良かったといえば良かったかもしれない。
だがそれも私が八歳になるときまでだった。

ある日の朝、一人の騎士が私たちの屋敷を尋ねてきた。

父が仕えていた領主に仕えていた三人の騎士の内の長だった。
何でも、兄を騎士にする為に修行に連れて行くというのだ。
突然の話だった。本人でさえ目を見開いて驚いていた。
その日の内に、兄はその騎士と旅立った。

それからはずっと独りぼっちだった。
父は見向きもしてくれなかったし、一番上の兄は出来損ないの哀れな弟といって馬鹿にした。
でも何より二人に視線が怖かった。
哀れみと蔑みの混じった冷たく、冷酷な視線。

屋敷の中では独りぼっちだった。
私に幼い頃から仕えてくれたお手伝いさんも生活の為に仕えてくれただけ……
一番上の兄も頼る事ができるはずもなく、友のように親しかった二番目の兄は修行の旅に。
私は待つ事しかできなかった。二番目の兄が修行から帰るその日まで。
だから私は待った。ただひたすら待った……

そして兄が帰ってきたのは四年後だった。
私は走って迎えにいった。早く会いたかったんだろうな。
本当に長い間一人ぼっちだったから。
寂しかったから……
でも兄を目の前にして感じたんだ。

同じ視線だ……あの冷たく蔑みの混じった。
気のせいだと思いたかった。信じたかった。
でも、でも、兄の一言が淡い希望を断ち切った。

「いつまでもお前は子供のままだな。私がいなければ何もできないのか。この家の恥さらしめ」

痛かった。身が切り裂かれるような想いだった。

しかし事実だった。ただ自分の部屋に引きこもってじっとしているだけの生活を繰り返していたのだから。

でも、その一言はあまりに冷たすぎると思った。

四年間、何時も片時も忘れることなく帰りを待っていたのに……

でも、その一言のおかげで私は変われたのかも知れない。

その時の悲しみの気持ちを歌にて紙に書きとめたのだ。

その歌は偶然にも、ある吟遊詩人の目に止まったんだ。

一読してその吟遊詩人は感動の涙を流した。そして私に言った。歌の才能があると。

そして私に一言こういったんだ。

「一緒に来ないか。こんなにいい詩が書けるんだ。楽器と歌ができるようになれば良い吟遊詩人になれるよ」

嬉しかった。なんせ、初めて人に必要とされたんだから……

それから私は毎日その吟遊詩人の家に通った。一人前の吟遊詩人になる為に。

血のにじむような思いで練習をした。　師匠であり、初めて私を必要としてくれた人を失望させない為に。

もう見捨てられたくなかった。独りぼっちになりたくなかった。

そして私が十五歳になった日、師匠は私に初めて歌を歌う機会を与えてくれたんだ。

三年間の修行の果てに初めて与えられた初めての歌の披露。

はじめは路傍で歌うのかと思った。でも違った。
何と領主の館だった。いきなりの大舞台だった。
晩餐会の余興として呼ばれたのだ。
領主は当然ながら、領主の側近達も一緒であった。もちろんその中に父いた。
私が現れたとき、本当に父は驚いていた。
文字通り、目玉が飛び出そうな勢いだったね。
何時も冷静で落ち着き払っていた父が慌てる姿を見るのはまさに滑稽だった。
緊張はしたけれど、余興は無事成功に終わった。
それからだったかな、私の人生が明るい方向に転じてきたのは……

「ルーカス兄さん。もう話はおしまい？」
私を過去から戻す声が聞こえた。
「ああ、そうだよ」
物語を語り始めてから一時間近く経っていた様だった。
「でもすごいね。今までの全部暗記してるの？」
「ああ、そうだよ」
一時間ぐらいの物語を暗記することは結構簡単だ。
それに暗記どころか、ほかの事を考えながら、物語を語る事だってできるのだ。

まあ、それくらいできないと一人前の吟遊詩人にはなれないからな。

「僕にも何か物語を教えてよ」

「そうだな……いいぞ。でももう少し簡単なのを教えてやろう」

私がそういうと両手を挙げて喜ぶ少年たち……。

私はいつの間にか立場が変わってしまったようだ。

頼るほうから頼られるほうへ……

# 第三話

街。
それは多くの人々が様々な営みを行う場所。

眼下に広がるのは大都市ブルックモンド。
中央ゴンゾール国の首都でもある同都市は、人口十五万を有する東大陸有数の大都市である。
東大陸最大の湖マナール湖畔の東岸に発展し、ブルックモンドの水源でもあり、生活の糧を与える場所でもり、自然の要害であった。
街の西側は堅牢な城壁に囲まれており、外敵からの防衛力はかなり高く、数々の外敵を退けてきたのであった。

ルーカスと少年達は街の西側に位置する宿屋にいた。
すでに日は暮れており、どこか遠くで鴉が鳴いていた。
テーブルを囲む六人の前にはパンとシチューとサラダの三品が丁寧に並べられていた。
全員分の配膳が終わると、少年達はいっせいに両手を合わせ始めた。
あまりに突然の事だったので、とてもびっくりしたが私も一緒に手をあわせることにした。
「豊穣の神エマリよ。今日も我らにささやかな糧を授けてくださったことを感謝いたします」
一番年長者の少年が声高らかに感謝の祈りの言葉を神に捧げる。
「いただきます」
全員が声を合わせて言うとささやかな夕食が始まった。
ささやかな至福のときである。少年達の顔も明るい。
「明日から職を探して街を回るのかい」

私は隣に座っている年長者の少年に聞いた。
「そうです。でも大体目星は付いてるんですよ」
「へえ、何の仕事だい」
「魚や家畜の解体の手伝いですよ」
「……そうなんだ」
あまりに意外な仕事内容に一瞬言葉を失ってしまった。
普通日雇いの出稼ぎ労働といえば肉体労働が主流である。なぜなら技術を必要としない肉体労働は体力さえあれば従事でき、比較的雇用数も多いからである。
少年が言った職業はどちらかというと技術職で雇用数も多くはないだろうと思う。それになによりそんな仕事をやろうと思う奴はいないと思ったからだ。
「珍しい仕事だと思ったでしょう」
少年は私の眼をじっと見ながら言った。心の奥底を覗かれている様な感覚だ。
「隠さなくたっていいですよ。黙っていても分ります」
「なぜこんな仕事を？　他の仕事だってあるでしょう」
私がそう言うと、大きなため息をつきながらこういった。
「仕方が無いのですよ。生きる為には仕事のえり好みさえできないのですよ。えり好みなんてしてたら、餓死して犬の餌になるか、不幸か幸いか盗賊ギルドに拾われて捨て駒として使われるかのどちらかですよ。」
少年はそう言うと、冷めてしまったスープに口をつけた。
それから私も残っていたサラダを食べ始める。
美味しくなかった。みずみずしいはずの野菜も喉を通るのがやっとだ。
至福のときであるはずの食卓が、どんよりとした重たい雰囲気に支配されるのであった。

食事を終えて私は一人部屋に居た。
隣の部屋に居る少年達はもう寝てしまったのだろうか、随分と静かだ。
窓から差し込む月の光は、まるで舞台のスポットライトのようだ。
私のその光を見てふと考えた。
あの少年たちのような人達に月のスポットライトを当ててみたいなと。
彼らの存在はこの大きな世界から見れば果てしなく小さい。
いてもいなくてもわからないかもしれない。
例えるなら、名前すらない脇役以下かもしれない。
物語の結末を知る事すら許されないのかもしれない。
だが、そこに存在している限り意味はあるのだ。
物語の登場人物は一人でも欠ければ成立しない。
それだけで存在理由になるではないか。
ただ、スポットライトを浴びる事が許されないだけ。
私はむしろそういう人たちにスポットライトを当ててみたいと思う。
目立つことなくただひたむきに生きる事。
それはもしかしたら、捕らわれの姫君を助けに行く王子よりもかっこいいかもしれない。
求婚者が後を絶たない姫君よりも美しいかもしれない。
私はそういう人たちにスポットライトを当てていこうと思う。
きっと私にはできるはず。
そう、私は物語の紡ぎ手なのだから……

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7154b/

吟遊詩人放浪記

2010年10月10日16時08分発行